佳作

風を切って

三浦真帆

「あ」と、思わず声が出た。四階まで立体駐車場を登ってきてやっと見つけた駐車スペースを、横からヌルリと現れた軽自動車に奪われた。香山信宏（かやまのぶひろ）はただただ軽自動車の駐車を見守ることしかできずに固まった。運転手は香山よりも一回りは若い女性で、水色の丸っこいフォルムをした軽自動車を実に鮮やかに操作し、一回のバックで駐車を決めてみせた。

　その巧妙な手口と女性の涼やかな顔に思わず呆気にとられていると、後ろのボックスカーからクラクションが鳴らされた。慌ててハンドルを切り、アクセルを踏む。残る希望は五階と屋上だったが、香山は駐車を諦め、出口へと向かった。駐車スペースが空いているよう願ったり、空いていなくて気を落としたり、空くまで根気強く待っているような感情の動きはただ無料の駐車場に駐車したいという思いと天秤にかけたときに明らかに無駄な重さだった。グルグルとひたすらに時計回りを続け、駐車場を出る。別の駐車場でいいだろう。香山の務める赤松市役所の周辺には、お手頃とはとても言えないがいくつか有料の駐車場があった。今からなら信号の運が悪くてもゆっくり歩いて十分始業に間に合うだろう。勤続二十二年目の香山にとって、これくらいの逆算は容易なことであった。

2014/03/04　07:15
From 岡本裕樹
タイトル　おはようございます
本文
　おはようございます。お疲れ様です。
　今日は朝から俺と香山さんで例の赤松南公園の視察だそうです。

　連絡遅れてすいません m(_ _)m

　若者は苦手だ。

　香山は市役所の中に入ったところで自動ドアに無駄な動きをさせてしまったことに気がついた。直属の部下から届いたメールに眉をひそめる。仕事の連絡が突然なのは部下のせいではないからまあいい。しかしなんだ。この記号の羅列は。「顔文字」が若者の間では文字と同じように使われることは知っているが、茶化しているようにしか思えなくて香山はなんとなく嫌いだった。今日は車を駐車場に入れるのにも時間がかかったし、なんとも上手くいかないことばかりだ。八つ当たりのよう

にケータイを少し荒く閉じると、「香山さん」と聞き慣れた軽い声が呼んだ。
「ああ、岡本か」
　メールの主が、黄緑色のマウンテンバイクを押してこちらへ駆けてくる。
「おはようございます。朝、職場行ったらいきなり香山さんと公園に行けって言われて」
　挨拶もおざなりにして言い訳を始める岡本裕樹（おかもとゆうき）を香山は手で制した。
「それはいい。課長の突然の命令が俺に来るのはよくあることだ」
　課長は自分たちがおしどり夫婦ということもあってか家族というフレーズに弱い。家族がいなければ無理がきくと思っているのか、帳尻あわせのギリギリの仕事は独り身である香山のところへ来ることが多いのだ。
「香山さん公園までなにで行きますか」
　香山が苛ついている空気を感じ取ったのだろうか。突然岡本が聞いてきた。香山は「車」と答えかけ、今日は役所の駐車場に駐車できなかったことを思い出す。
「電車かな」
「ちょっと遠回りになりますよ」
「確かにそうだが……」
　せっかく数分前に駐車した車をまた出すのはあまりにも惜しく、香山は車を使うことを諦める。すると岡本は少し考えてから顔を上げた。
「あ、じゃあこの自転車使いますか？　俺走るんで」
　屈託のない笑顔に圧され、半歩下がる。頬を引きつらせながら香山はやっとのことで手を振った。
「いや、いい。お前が使え」
　やはり、若者は苦手だ。
　赤松南公園は、その名の通り赤松市の南にある公園だ。錆びた鉄棒、色の落ちたジャングルジム、取り外されたブランコ。古びた遊具が隅の方に配置され、真ん中には広いグラウンド。しかし、そこに子供達の姿はない。さびれた公園を取り壊し、老人ホームを建てるという計画が市で持ち上がったのが去年の春のことだ。香山はその責任者に任命され、二年目の岡本が補佐についた。
　香山は公園の看板に貼られた「赤松南老人ホーム建設のお知らせ」を横目で眺め、公園の中に入った。
「ほんとにさびれてますねえ」
　岡本が腐敗したベンチをつま先でつつきながら言った。
「昔は近くの団地の子供が放課後に遊びに来てたんだ」
　今はその子供達も独り立ちし、高齢化が進んでしまったが。と、説明を続けると、岡本は意外そうな目を香山に向けた。
「香山さん詳しいですね。実家ここらへんなんですか？」
「いや、昔、少しだけ、住んでただけだ」
　歯切れが悪くなるのに気づかれないよう、香山は岡本に背を

向ける。怪訝そうなまなざしが痛いくらいに伝わってきた。それもつかの間。
「うっわっ」
岡本が虚を突かれたような声を出し、香山の背中に頭突きをかました。つんのめって一、二歩前に出る。文句を言おうと後ろを振り返ると、岡本は地べたにうつぶせに倒れていて、ベンチの横には野球帽をかぶった男の子が息を切らして立っていた。その出で立ちに既視感を覚え、香山は男の子を注意深く見る。青の短パンに白いライン。ポロシャツの校章で気がついた。これは赤松小学校の指定ジャージ。三十年ほど前に香山自身も着ていたジャージだ。
「このっ。おいくそガキッ」
膝を押さえながら岡本が立ち上がる。普段、役所仕事で見せる人当たりの良い声色は姿をひそめ、荒々しい口調だ。どうやら岡本はこの男の子に突き飛ばされたらしい。
「お前、市役所のやつだろ」
男の子が岡本の市役所職員用の名札を睨みつけながら言った。続いて香山の名札も睨みつける。
「この公園を壊すのはやめろ！」
男の子は大声をあげ、もう一度岡本に向かって突進してきた。男の子のタックルをそのまま受けた岡本はしりもちをつく。ぐちょりと音がして、岡本の足が草むらの中に隠れていたぬかるみにはまった。そういえば一昨日まで激しい雨が続いていた。
岡本はこめかみを引きつらせ、ゆっくりと立ち上がった。逃げる男の子を捕まえようと追いかける。本人達はいたって真面目だろうが、公園の中で追いかけっこをしている様は傍から見ると遊んでいるようにしか見えなかった。
「おい岡本。いいから、もう行くぞ」
香山は走り回る岡本に呼びかけた。子供と言えど、相手は市民だ。下手に衝突して引責問題になることだけは避けたい。
「なんでですか香山さんっ。こういう悪ガキは見逃すとつけあがるんです」
しかし岡本は香山の意図には気づかず、追いかけっこを続ける。やがて逃げ場を失った男の子は、最後のあがきとでも言うようにジャングルジムを登り始めた。
「おい！　降りてこい」
岡本が下から怒号をあげる。
「やだ！　公園を壊さないって言うまで降りないからな！」
男の子は一番上まで登り、仁王立ちした。
「なんで壊しちゃいけないんだよ」
岡本がやっとその理由を聞く。
「俺たちのチームがなくなっちゃうからだよ」
チーム？　岡本と香山が顔を見合わせ、首をかしげたその時。
「こら拓也（たくや）っ」
公園の入り口の方から、男の大声が飛び込んできた。聞く者を従わせるような、先生のような声。男の子はその大声にびくっと身を震わせた。
気づいたときにはもう遅かった。男の子は足を滑らせ、ジャ

ングルジムから落下していた。

「あっ」

　ひるんだ岡本を退かせ、香山が前に出る。男の子を抱きかかえると、だらりと腕がこぼれた。意識がない。長期休みの健康特番ぐらいしか見ない無知な香山の頭に、脳震盪という文字がかろうじて光った。

「拓也っ」

　男の子を怒鳴った男が慌てて駆けてくる。細身だが筋肉質のその男は香山よりも少し年が上のようだった。前髪がうっすらと白くなってきている。男の子の親には見えないが、祖父にしては若い気がした。男の子の肩をつかんで揺さぶろうとする男を止めて、香山は言った。

「下手に動かさないで、すぐに病院に連れて行ったほうがいい」

　男は男の子を抱き上げ、香山に頭を下げる。

「お騒がせしました」

「あのっ」

　公園を去ろうとする男を、岡本が呼び止めた。

「チームがなくなるって、なんのことですか」

　男は驚いたようにまばたきをし、それから寂しげに笑った。男の子の頭を軽く撫でる。

「チームというのはこの公園を練習場所にしていた野球少年団のことです。私はそのチームの監督で。公園がなくなるので、チームも解散するんです」

　公園には、香山と岡本だけが残された。岡本もさすがに反省しているようで、腐敗したベンチに座り込んだまま俯いている。

「まあ、誰にだって失敗はある。今のはガキっぽい失敗だったがな」

　香山が慰めようとしているのかしていないのか分からないような言葉をかけると、岡本はやっと顔を上げて香山を見つめた。

「香山さん。この公園は本当になくなってしまうんですか」

　香山は目を大きくさせて岡本を見つめ返した。市民にケガをさせたことをいっぱしに反省しているのかと思いきや、そんなことを考えていたとは。

「まあ、そうだな。計画はもう動いている」

「そうですけど」

　岡本はまた視線を下げ、自分のつま先に目をやった。

「可哀想じゃないですか。なんとかならないんですか」

　まるであの男の子の野球チームを解散に追い込んでいるのは香山だとでも言うような言い方にカチンときた。自分のことは棚に上げ、被害者面しやがる。

「なんだ、随分と他人事だな。自分だって市役所の一員だろう」

　岡本は言い返そうとしたのか口を開け、そのまま何も言わずに閉じた。顔が真っ赤になっている。

「全員が納得する解決策があればいいのに」

「そうは上手く行かないことの方が世の中に溢れてるんだ」

　諦めろ。香山の言葉に岡本は眉間にしわを寄せて抵抗する。最近の若者はなんでも自分の思い通りにいかないと気が済まな

いらしい。黙っていても伝わってくる岡本の不満そうな姿に、メールのあのふざけた顔文字が目の前をちらついて苛ついた。
「生活課の、香山信宏さんですか」
　喫煙場に向かおうとぶらぶら役所内を歩いていると、若い女性の声で名を呼ばれた。香山は慌てて煙草の箱を胸ポケットに入れ、振り向く。
「ええ、そうですが……あっ」
「なにか」
「い、いや、なんでもない」
　思わず声が出たのは、声をかけてきた彼女が数日前の朝、香山から華麗に駐車場を奪っていった軽自動車の運転手だったからだ。しかし、あの出来事を彼女が覚えているとは到底思えない。
「そうですか」
　香山の読み通り、彼女は顔色一つ変えず香山を見据える。
「観光課の、江川(えがわ)さん」
　彼女の名札を見て名前を確認すると、江川はこくりと小さく頷いた。
「どういったご用件で」
「先ほど、三上(みかみ)さんという方からお電話がありました」
「三上さん……？」
　聞き覚えのない名前に首をかしげると、「お子さんが香山さんにお世話になったので直接お礼が言いたいとか」と、補足説明がなされ、公園の件を思い出す。
「ああ……」
「生活課の方に取り次ぎをしましたので生活課長さんからも連絡が入るかとは思いますが、たまたま姿をお見かけしたので。それでは」
　江川は会釈をし、廊下の曲がり角へ消えていった。かと思いきや、くるりと身を反転させてこちらに戻ってきた。
「あの」
「は、はい」
「岡本の上司だとか」
　江川の鬼気迫る表情に、香山はゴクリと生唾を飲み込んでから頷いた。
「岡本は軽く見られがちですが、思いついたら周りが見えなくなる熱い人間で、そこがまた面倒なんですけど、とにかく誤解されては困ると思いまして、その、つまり、」
　江川は一息で早口言葉のように言葉を羅列した挙げ句、大きく息を吸って深々と頭を下げた。
「誤解だけはしないでやってください。宜しくお願いします」
　顔を上げた江川は元の無表情に戻っていて、香山は呆気にとられた顔で彼女の後ろ姿を見送った。
　一服を諦め課に戻ると、案の定岡本が課長のデスクの前でうなだれていた。
「おお、香山。お前もこっちに来い」

課長が手招きをして香山をデスクに呼んだ。香山は少し小走りに課長のもとへと向かい、岡本の隣りに立つ。
「数日前の視察、近隣住民と移転に関することでトラブルになったとは報告されていたが、苦情の電話がくるとは聞いてないぞ」
「申し訳ありませんでした」
香山は深々と頭を下げる。しかしいくら待っても岡本が頭を下げる気配がないので隣りの様子を窺うと、岡本は何かを決心したような顔で口を開きかけていた。
「あの、実は、あのとき……」
何を言う気だ。香山は咄嗟に岡本の頭を押さえこみ、無理矢理礼をさせる。
「岡本、なんだ言ってみろ」
課長の声に反応し、岡本が頭を上げようと抵抗してくるのが分かる。香山は岡本の頭を押さえたまま一気にまくし立てた。
「確かに、確かに口論になったのはお前の痛癪のせいだ。でもそれは上司である俺の責任なんだ。頼むから部下に責任をなすりつけるような、みっともないことはさせないでくれ」
岡本はなおもあわあわと口を開こうとするが、課長は香山の説明で納得したようだった。
「とにかく、苦情を言いに市役所まで来られたら面目が立たない。こちらから出向くと連絡してあるから、明日午後十六時の約束だ。必ず行けよ」
「はい」
もう一度深く頭を下げ、香山は課長のデスクを離れた。岡本は課長と香山をキョロキョロと見比べた後、課長に一礼をして香山の後を続いた。香山はそのまま課を出て、喫煙室の前まで来たところでくるりと振り返った。
「どこまでついてくる気だ」
「えっと、あ、庇っていただいてありがとうございました」
「庇う」という言葉に全く思い当たりがない香山は眉をひそめて首をかしげる。
「拓也くんに怪我をさせてしまったこと、最後まで黙っててくれました」
「あ、ああ……」
真摯な目をこちらに向ける岡本に本当のことを告げるのは面倒だと思ってしまった。自分が責任をとらなければならないから不用意に事故のことを話したくなかったという本音は。
「俺、ちゃんと自分で責任とります」
二人の温度差に気づかず、息巻いた様子の岡本に、香山は嫌な予感を感じた。

翌日、香山が待ち合わせ場所に着くともうそこには岡本がいた。黄緑色のマウンテンバイクと共に佇んでいる。香山に気がつくと、黙ってお辞儀をした。手には、見慣れないセカンドバッグを抱えている。岡本はいつになく緊張した面持ちで香山の後ろに従う。男の子の家は、公園の近くにある団地の一郭だった。インターホンを鳴らすと、エプロンをつけた女性が出てきた。
「こんにちは。赤松市役所の香山信宏です。隣は部下の岡本裕

樹です」

「この度は拓也くんに怪我をさせてしまい、申し訳ありませんでしたっ」

岡本は香山の前に出て、直角のお辞儀をする。その気迫におされ、女性は半歩後ろに下がった。香山も岡本の凄みのある謝罪に度肝を抜かされ、立ち尽くした。

「あの、大丈夫ですから。顔を上げてください。私は拓也の母です。ご連絡したのも、うちの拓也がお兄さんに謝りたいって言ったからなんです。まだ学校から帰ってきてないんですけど。どうぞ上がってください」

母親の招きでリビングへと通される。飲み物を用意しますと言って母親がキッチンへと去り、二人は並んで椅子に座った。

小さい子供がいるにしては、リビングは片付いていた。いや。と香山は考え直す。今日は来客がある日だから片付けたのかもしれない。その証拠に、壁には拓也くんが書いたと思われる絵や、マラソン大会の賞状などが雑多に飾られている。並んでいる家族写真を見ていると、母親が自分と同い年くらいだということに気がついた。今自分は四十五だから、拓也くんぐらいの子供がいても何も不思議なことはない。いまだ独り身なことを勝手に卑屈に思っていると、母親がお盆に紅茶をのせて帰ってきた。勧められて香山は一口つけたが、隣の岡本は緊張した面持ちでカップの縁を見つめている。何とか場を和ませようと、香山は口を開いた。

「拓也くん、マラソン大会で三位じゃないですか。すごいですね」

賞状を指して言うと、母親はいえいえと恐縮した。

「元気が有り余っていて、生意気で」

確かに、大人の男をいきなり突き飛ばすぐらいには元気で生意気だ。

「いえ、赤松小学校のマラソンコースをこの時間で走りきるのはすごい力ですよ」

ぬかるみに足をはまらせた岡本を思い出しながら言うと、母親はほっとした様子で香山を見つめた。少し俯き、「やっぱり」などと呟いている。

「あの、どうしました？」

香山がいぶかしげに眉をひそめたその時、ガチャっと大きな音がして玄関から子供の足音が聞こえてきた。

「お母さんただいま。あ、やっぱり来てた！」

拓也くんがものすごい勢いでリビングに滑り込んできた。とたんに岡山が立ち上がり、先ほどのように深々とお辞儀する。

「この度は……」

「そんなのいいからさ」

拓也くんは岡本の決死の謝罪を一蹴し、岡本の向かいの席に座った。

「俺の方こそ突き飛ばしたりしてごめんなさい。俺らのチーム、人数は少ないし弱いけどみんな仲が良くて、大好きなチームだったんだ。それが離ればなれになるのが嫌であんなことしちゃった。ごめんなさい。怪我ももう大丈夫だから安心して」

拓也くんはニヤッと笑って頭を見せた。確かに傷らしい傷も

見つからず、ただたんこぶの腫れがうっすらと残っているだけである。謝罪を封じられ、さぞ慌てているだろうと思って隣を見ると、意外にも岡本はずいっと身を乗り出して拓也くんにせまった。

「そのことなんだけど」

　真剣な表情を浮かべる岡本に、拓也くんはこくりとうなずいた。

「俺、悔しかったんだよ。都市開発っていうのは新しいものを作る仕事もあるけど、そのために壊さなくちゃいけないときもある。でも、壊したい人もいれば壊したくない人もいる。誰かには嫌な思いをさせちゃう仕事なんだ。みんなが幸せになる方法はない」

　隣で紅茶をすすりながら、香山は心の中で頷いた。岡本は諦めることも時には肝心だとやっと気がついたのだろう。

「解決策はないって思ってたんだけど」

ん？　と岡本の言葉にひっかかる。今こいつは、逆接を使ったか。

　そんな香山には気づかず、岡本はセカンドバッグから分厚い書類を取り出した。

「俺、どうしても諦めきれなかったんだ。どうにかして拓也くん達も幸せになれる方法はないかなって。考えた」

　拓也くんにも読みやすいようにか、簡単な文章で書かれたその書類を、拓也くんは食い入るように見つめる。ちらりとのぞくと、『赤松南公園野球大会』という題字が見えた。

「ごめんね。公園を残すことはもうできないんだ。でも、このまま、みんな何もないまま離ればなれは嫌だろ？　この公園で練習した思い出がなくなっちゃうのは嫌だろ。だから最後に公園で大会を開いて、一生の思い出にするんだ。場所はなくなっても思い出は残る。どうせなら、一番いい思い出で覚えててあげたいじゃんか」

　普通に考えれば無理な提案だった。野球大会を開くといってもいろいろなところに許可が必要だし、公園が取り壊されるまで時間が残されていない。

「おい、岡本。そんな都合のいいこと言って、実現できなかったらどうするんだ」

　小声でたしなめると、岡本はやけに自信ありげな顔でこちらを見た。

「確かに市が主催のイベントにすることは無理です。でも、市民が主体となって作るイベントを手伝うことはできる。赤松市活性化基金っていって、援助金が出る制度もあるんです」

　目を丸くした香山に、岡本は頭をかきながら続ける。

「まあ、江川の入れ知恵なんですけど」

「江川って、あの観光課の」

「小学生からの幼なじみなんです。腐れ縁ってやつですね。どこから話を聞いてきたのか、突然いろんな資料を持ってきて」

　ガツンと頭に衝撃が走った。自分が責任逃れのためにずる賢い知恵を回していた頃に、若い二人はもっと先の可能性を見ていた。そして、実現可能な未来にまで漕ぎ着けていた。その事

実を認めるのが恐ろしくて、香山は頭の中で言い訳を重ねる。市民が主体って、誰がそんな面倒なことを引き受けてくれるんだ。野球大会をするならチームを集めなければならないし、駐車場や簡易トイレの手配だって、道のりはまだまだ険しいはずだ。

「行こう！　早く公園！　行こう！」

大人の話が終わったと判断した拓也くんは興奮した様子でピョンピョンと跳びはねた。岡本も「おうっ」などと返して脇目も振らず外へと駆けていった。やはり岡本は子供だ。

「おい、ちょっと待て！　すいません。追いかけます」

香山は母親に頭を下げ、二人の後を追う。若い二人は香山が階段から降りた頃にはもう後ろ姿も見えなくなっていた。団地の駐輪場に黄緑色のマウンテンバイクが見えた。香山はため息をついて岡本がおいていったマウンテンバイクを押していく。公園に着くと、二人はまるで同級生の友達のように公園の遊具で遊んでいた。背の高い岡本が足を折り曲げてすべり台を滑る様子は傍から見ていて恥ずかしい。

「香山さん」

呼ばれて振り返ると、拓也くんの母親が申し訳なさそうに立っていた。

「すぐに周りが見えなくなるんです。すみません」

下げられた頭に、九割方岡本のせいだと申し訳なく思ったその時、母親が香山を遮って決心したように切り出した。

「それから、その、確認というか、聞きたいことがあるんですけど」

「えっと、はい」

「私、三上香苗（みかみかなえ）といいます。旧姓、藤原香苗（ふじわらかなえ）です」

突然自己紹介をされても。と言いかけたが、ふじわらかなえという響きに記憶の奥底のなにかが光った。

「六年生の時に赤松小学校に転校してきた香山信宏くんだよね」

彼女の困ったように下がった眉と笑ったときにできるえくぼに見覚えがあった。

「あのときのこと、まだ怒ってる？　ひろくん」

彼女にそう呼ばれるのが、好きだった。

「なんのことだか、さっぱりわからないのですが」

拓也くんと一緒になってはしゃぎ回る岡本の声が、はるか遠くに聞こえた。

赤松小学校６－３卒業旅行
卒業式の次の日に赤松南公園に集合！
みんなで最後の思い出作る！

そんな張り紙が教室の後ろの黒板に張り出されたのは、卒業式を一週間後に控えた昼休みだった。卒業旅行といっても、地域で一番大きいデパートに行って、みんなでご飯を食べたりするくらいのものだ。一つ上の学年のあるクラスがやったのを聞き、来年は俺たちもやろうと一年前から約束していたのだ。し

かし信宏は参加するか悩んでいた。父親の転勤について行って春から違う県の中学校に通うことになっていたのだが、まだ誰にも切り出せないでいたのだ。
　放課後、一人で張り紙を眺めていると、後ろからとんとんと肩をたたかれた。
「ひろくん、行くでしょ？」
　振り向くと、立っていたのは香苗だった。この小学校に転校してきてはじめての隣の席の女の子だった香苗に、信宏はほのかな恋心をいだいていた。
「ああ、もちろん。行くよ。かなえちゃんは？」
「行くに決まってるじゃない。楽しみだね」
「そうだね」
　信宏は自然になるように心がけて香苗に笑いかけた。香苗も嬉しそうにえくぼを浮かばせる。転校のことは後で、タイミングを見て言えばいい。中学校が離れてもずっと友達だし、たまになら会うことだってできるだろう。そう思った。
　卒業旅行当日、公園にはクラス全員の姿があった。香苗の姿も見つけ、信宏の心は浮き立った。
　クラスのリーダーの健一（けんいち）がみんなの前に立った。
「じゃあ、今日の行き先を発表しまーす」
　何につけてもみんなの上に立ってクラスを引っ張ってきた健一は、今回の卒業旅行の発案者であり、計画も担っていた。
「じゃーん隣町の赤松北遊園地です」
　予想だにしなかった場所にクラスのみんなは一瞬静まりかえり、事態を飲み込んできたのか歓喜の声が上がり始めた。全員で健一コールだ。
「でも遠いじゃん。どうやって行くの」
　誰かが聞くと、健一はワルい顔になって言った。
「自転車で行くんだよ。俺、道ちゃんと調べたから」
　またクラスみんなで健一コールだ。そんな中、信宏は一人不安げな様子で手を上げた。
「でも、自転車って、だめだろ」
　小学校では、自転車は学区内しか走ってはいけないと言われていた。何人かがそうだよなあと俯くが、健一は引き下がらない。
「もう卒業したんだし、いいだろ」
「四月一日になるまではだめだって言われた」
「めんどくせえなあ」
　健一はがりがりと頭をかいて、ため息をついた。しかし、信宏の言葉に不安になる仲間達も増え始める。
「赤松デパートでいいよ」
　誰かがそう言うと、賛同する声がちらほらと聞こえた。健一は顔を真っ赤にして、叫ぶように言った。
「なんだよお前ら！　信宏のカッコつけに騙されんなよ！」
　健一の言葉に、信宏はびくりと身を震わせる。それを見た健一はさらに調子に乗ってしたり顔で言った。
「お前、香苗の前でいい格好したいだけだろ。お前香苗のこと好きだしな」

周りの時が一瞬にして止まった気がした。むしろずっと止まり続けていてくれと願ったが、そうはいかなかった。

「信宏、香苗のこと好きだったのかよ」

いつも悪ふざけをして先生に怒られる男子が信宏の肩をこづく。恋愛話が大好きな女子達は競い合って香苗を前に押し出した。

「ひろくん、あの」

香苗の眉が困ったように下がった。健一に対する怒りを上回るほどの焦りが、信宏の体を駆け巡った。

「もういいっ」

信宏は小さい子供のわがままのような捨て台詞を吐いて、公園から逃げた。それから何も言わずに信宏は引っ越し、二度とあのときの仲間と連絡を取り合うことはなかった。

今思えば、他愛もない子供のケンカだ。その後引っ越してしまったからこじれたままなだけで、ちゃんと仲直りできたはずだ。しかし、この時逃げた思い出が、自分の逃げ癖を作っている気がする。

一人しか帰ってこない自宅のマンションのベランダで、香山は煙草を吸いながらそんなことを思った。

若い頃の情熱から逃げている。香苗からも逃げた。岡本のことだって、はじめから最近の若い奴はと決めつけて、岡本自身を見ることから逃げている。自分はこうだから。世間はこうだからと言って、目の前の新しいものに取り組むことから逃げている。新しい考えを入れることから逃げて、意固地を決め込んでいる。

岡本の言葉が思い出された。そして、自分は今あの赤松南公園で最悪の思い出しか持っていないことに気がついた。

小さいポケットに収まっている、時代から逃げたガラパゴスケータイを開いた。日付が変わる直前だ。こんな時間にメールを出すなんて、非常識だろう。

そんなこと今は気にしない。香山は少し迷ってからあれを使ってみることにした。

エムかっこアンダーバー、アンダーバーかっこエムなるほど。確かに使い勝手がいいかもしれない。

2014/03/11　00:03
From 香山信宏
タイトル　無題
本文
今から赤松南公園に来てくれ m(_ _)m

香山が公園に着くと、岡本は昼間と同じように緊張した面持ちで立っていた。傍らにはやはり黄緑色のマウンテンバイク。

「やっぱり来たな」

「そりゃそうですよ。香山さんが顔文字使うなんて。一気に目が覚めました」

「別に仕事じゃないんだからいいだろ」
　そう言うと、岡本はさらに怪訝な顔になった。
「じゃあなんで俺は呼び出されたんですかね」
　岡本のような自分よりも若い奴にこんなことを言うのは恥ずかしかったが、岡本だからこそ言える気もした。
「俺も、最後にこの公園の思い出をいいものにしたいと思ってな」
　はあ、と、岡本はなおも腑に落ちない様子だ。
「まあ、香山さんのためならなんでもしますから申しつけてください」
　諦めたようにそう言う岡本に次の言葉を伝えるのがすごく嫌だった。当たり障りのないことを言って逃げようとする自分を押さえ込む。
「俺、自転車乗れないんだ」
　できるだけさりげなく聞こえるように、香山はなんでもないような声でそう言った。しかし岡本は聞き流してくれず、あっけにとられた顔でこちらを見つめてきた。
「俺の親父、転勤族でさ。同じところに二年いられれば長い方ってぐらいにあちこちを転々としてた。だから自転車買ってもらえなかったんだよ」
　言い訳がましいことを呟く四十五歳に我ながら腹が立つ。岡本はやっぱり黙ったままで、二人の間に数秒沈黙が流れた。ジジッと、虫が公園の蛍光灯に焼かれる音が聞こえた。
　小学生の頃、卒業旅行に自転車で行くことに反対したのは、真面目だったからでも、好きな女の子にカッコいいところを見せたかったからでもない。自転車に乗れないということを隠したかったからだ。
　つまらない意地を張って、本当のことを告げることから逃げて、最後の思い出を最悪の思い出にした。自分が去った後のあの公園は、どれほど雰囲気が悪かったことだろう。
「公園は変わっても、思い出は残るだろ」
　昼間の岡本の言葉を引用して言うと、岡本はああと納得したようにうなずいた。
「それで俺ですか」
　自分の黄緑色のマウンテンバイクを見つめる。それだけで岡本を呼んだわけではなかったのだが、まあいい。
　岡本のマウンテンバイクにまたがり、確認するようにハンドルを何回も握りしめた。
「いきますよ」
　背中から、岡本の声が聞こえる。
「離すなよ」
「離しませんよ」
「そう言って、俺がこぎ出した瞬間に手を離すんだろう」
　返事がない。返事の代わりに、岡本は問答無用で自転車を押し始めた。体を水平に保って、両足を動かす。右、左、右、左。から回ってペダルから足がずり落ちそうだ。両足の裏に神経を集中させて、一心不乱にペダルをこぐ。だんだん調子が良くなって、額の汗に風を感じられるほどには余裕も出てきた。

「香山さん、自転車乗れてますよ」

　気がつくと、岡本はやはり自転車から手を離していて、小躍りしながら手を叩いていた。香山はあそこまでと目標を立て、岡本のいる蛍光灯の方へハンドルを切った。

　風が気持ちいい。右、左とこぐたびに、今まで自分が拘っていたものを風がさらってくれる心地がした。

　逃げるのはもうやめだ。自分の情熱に、世間の大きな波に、傍らにいる人に、過去の遺恨に、これからは真正面から立ち向える。

　明日にでも香苗ちゃんの家を訪ねてみよう。今度は同級生として。

　香苗がどんな顔をするか想像をめぐらせながら、香山はブレーキをかけた。